

向ヶ丘弥生町の地名

JR 東日本のお茶の水駅を降りて、神田川（旧外堀）にかかる聖橋を渡り、少し進むと右手の森の中に見えるのが湯島聖堂だ。この建物は、もとは、元禄3年（1690年）、5代将軍徳川綱吉が建てた孔子廟を後に幕府直轄の昌平坂学問所（昌平黌）とした歴史があり、「日本の学校教育発祥の地」ともされる。明治4年（1871年）に閉鎖されるが、翌年には、旧薩摩藩士の町田久成（文部省博物局）が音頭をとった日本最初の博覧会＝湯島聖堂博覧会が開催されて、東京国立博物館の始まりとなる。

関東大震災後に再建されたその建物を眺め、交差点を左に曲がって、緩やかな登り坂となった本郷通り（旧中山道）を道なりにしばらく進んだ一帯が、東京大学本郷キャンパスで、道路の右手に有名な赤門がある。この赤門は、よく知られているように、旧加賀藩主前田家上屋敷の御守殿門で、1827年、第12代藩主前田斉泰が第11代将軍徳川家斉の21女、溶姫を迎える際に作られたものだ。赤門の前を通り過ぎ、本郷弥生の交差点を右に折れると、今度は緩やかな下り坂の言問通りが根津方面へと続く。お茶の水から東大本郷キャンパスにかけての周辺は、北側から舌状に伸びだした台地になっていて、この本郷台地を東側に降りたところにある不忍池周辺は逆に川沿いの低地となり、さらにその東側には別の高台、上野台地が広がっている。もともと、このような地形だったのだ。

さて、本郷弥生の交差点から東に向かう言問通りの両側は、東大キャンパスの文教施設が建ち並ぶが、下り坂を少し歩くと、住宅地が広がる景観が変わる。このあたりは台地の縁辺部で、昭和40年までは、「向ヶ丘弥生町」（むこうがおかやよいちょう）と呼ばれていた。言問通り東側の東大農学部を合わせた周囲一帯は、元和年間（1618～24）の頃から、御三家水戸藩の屋敷だった場所だったのが、明治2年（1869年）、前田家・水戸徳川家の屋敷地とともに新政府に収公されて大学用地となり、明治5年（1872年）に周辺に町屋が開かれた。文政11年（1828年）3月（弥生）、水戸家9代斉昭侯が、「名にしおふ春に向ふが岡なれば世にたぐひなきはなの影かな」と、同地の景色を歌に詠み、その歌碑が屋敷地内に建てられていた。「向ヶ丘弥生町」の地名は、その歌碑に由来するのだ。

根津の低地へと向かう言問通りの道沿いに、ひっそりと一つの石碑が建てられている（写真）。この石碑は、昭和61年（1986年）、地域の有史によって建てられたもので、表面には、「弥生式土器発見ゆかりの地」の文字が表面に大きく刻まれている。石碑



「弥生式土器発見ゆかりの地」石碑

の裏面に刻まれた建碑のことは、約100年前に同地で発見された土器が「弥生式」と名付けられ、弥生時代という時代の名称の由来となったことを顕彰するとともに、行政的

な地名が「弥生二丁目」と変わりながらも、町会は歴史的な「向ヶ丘弥生町」の地名を継承していることを誇らしく説明している。

弥生式土器の発見

明治17年（1884年）、帝国大学予備門の学生だった有坂鉛蔵は、大学の隣接地、根津の谷に面した貝塚から、赤焼きの壺を発見し、翌日、帝国大学理科大学の学生だった坪井正五郎、白井光太郎の両氏とともに現地を確認する。壺を預かった坪井氏は、明治20年（1887年）、その発見を学会に報告するが（『帝国大学の隣地に貝塚に跟跡有り』『東洋文藝雑誌』91）、その際には、土器の名称は与えられなかった。エドワード・モースが大森貝塚を発掘したのが明治10年（1877年）のことだから、ちょうどその10年後のこととなる。その後、大学の人類学教室内の会話では、「弥生式」の呼称が用いられていたものの、その名称が初めて活字に現れるのは、明治35年（1902年）になってからだ。在野の研究者だった蒔田鎗次郎が、田端から駒込へと抜ける現・山手線の工事で切り崩された切通しの調査で採集した土器とともに、自宅内のごみ捨て穴から発見した土器群を合わせて検討した論文で、初めて「弥生式土器」の名称が用いられ（『弥生式土器（貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ）発見ニ付テ』『東京人類学雑誌』122）、それ以降、弥生式土器の名称が学術用語として定着していくことになる。しかし、その土器が用いられた時代や文化についての研究が進むのは、もう少しの時間が必要だった。

モースが発掘した大森貝塚の報告書では、出土遺物が網羅的に記述・図示されるとともに、食人の風習が存在したことが主張された。「食人説」を受け入れた明治の人々は、野蛮な風習をもつ貝塚時代の人々は、自らの直接の先祖ではなく、先住民だったのではないかということで、アイヌ説やプレ・アイヌ説、コロボックル説などが唱えられた。一方、高塚（古墳）を残した人々は、「大和民族」の直接の先祖にあたると考えられた。これに対して、明治40年（1907年）、坪井正五郎門下の八木奨三郎が、日本の先史時代を研究していたスコットランド出身の医師、ニール・マンローとともに、「弥生式土器」を中間土器と呼び、石器時代と古墳時代の土器の中間に入る性質をもつと考えた。ここまで来ると、「弥生式土器」を残した人々の文化やその起源が関心事となるのは当然の流れになってくる。

最初の「弥生式土器」が発見された場所は、その後、宅地化が進むなかでよくわからなくなっていたが、昭和49年（1974年）、東京大学構内の旧浅野地区の発掘調査によって、二条の溝と貝層、弥生式土器等が検出されたことで、集落遺跡の様相が断片的ながらも把握されるようになった。昭和51年（1976年）には、都心部における弥生時代の数少ない貝塚を伴う遺跡として、重要性が評価され、「弥生二丁目遺跡」として国の史跡に指定された。また、さらにその後、周辺で集落に伴う方形周溝墓群なども発見され、集落構造の解明が進んでいる。しかし、最初の弥生式土器の発見地そのものは正確な場所を特定するには至っていない。石碑が建つ言問通りの坂を下り、地下鉄根津駅の交差点で不忍通りを右に曲がると、ほどなくして不忍池、上野公園の入り口が眼前に現れる。遠い過去には、このあたりまで海が入り込んでいたのだ。